012年(平成24年)10月25日(木曜日)

讀賣新聞

きしむ親子 4

家庭不和「将来自分も」

レストランに仲むつまじげな親子連れが入ってきた。東京の大学に通う男性(21)は、そんな姿を見る度に思う。「親子って、あんな風に楽しそうに外食するんだ」

羨ましいと思う反面、自分には温かい家庭を育むことはできないだろうと思う。「家族だんらんの記憶がない。幸せな家庭を築ける自信がないから、結婚したいとも、子どもを持ちたいとも思わない」

男性の母は、姉を産んだ後に離婚。父と再婚して自分が生まれた。父は、実の子の自分には手をあげなかったが、姉にはささいなことで暴力をふるった。常に緊張し、父と一緒にいたいと思ったことがない。数年前、父の不倫が発覚すると、母からは父の悪口ばかり聞かされた。昨年、離婚が成立した時は、ホッとした。

ただ、自分も将来、父のように家族を不幸にするのではないかと不安になる。「親子が仲良く暮らす家庭で育っていれば、こんな風に考えなかったかもしれない」

＊

離婚や父母のいさかいは、子どもの心身の発達にどんな影響を与えるのか――。米国では、1980年代から活発に研究が行われているテーマだ。しかし、日本では、離婚に対する偏見につながる、子どものプライバシーの侵害になるとして研究は進まなかった。

道行く親子連れを見つめる男子大学生。「あんな仲の良い家庭は築けない気がする」(9日、東京都内で)

2006～07年、茨城大の野口康彦准教授はこんな研究を行った。大学生321人を「両親の仲が良い」「仲が悪い」「離婚した」の3群に分け、自己嫌悪や心身の不調などの抑うつ傾向を比較したのだ。その結果、「仲が悪い」群の学生が最も抑うつ傾向が強く、将来への期待感も低かった。「仲が良い」と「離婚した」では差がなかった。

野口准教授は「離婚そのものではなく、親の仲の悪さを見せられ、争いに巻き込まれることの悪影響が大きい。逆に子どもが親の離婚を肯定的に捉え、生活環境が整えば、自立心が強くなるなどプラスの面もある」と分析する。

ただ、親の離婚を経験した学生への個別インタビューの中では、生活環境の変化による様々な体験がトラウマになったり、異性と親密になることを恐れたりするケースもあった。野口准教授は「子どもの傷をいやすためには、親や周囲が子どもの気持ちを受け止め、支える環境を作ることが大切だ」と話す。

＊

今月21日、東京都内で「法と心理学会」が開かれ、東北公益文科大の益子行弘講師(福祉心理学)が、両親が離婚した一人親家庭の子ども212人を対象にした調査結果を報告した。「離婚後に別居する親に会えていない子」と、「月1回以上会えている子」を比較したものだ。

「自分は悪い人」「他人から嫌われやすい」――。自分をそんな風に捉えていたのは「会えていない子」たちだった。別居した親と交流がある子に比べ明らかに、自分を大切に思える「自己肯定感」が低く、他者との友好な関係を築くのが難しい傾向があった。

益子さんは、「会えていない子」が、別居する親の悪口を同居する親から聞かされている割合が91%あることに注目した。「会えている子」は28%だった。「『別居する親に会えない＝悪影響』という単純な図式ではない。別居する親への否定的な態度そのものが子どもの心理に影響を与えている可能性がある」

「保母さんになりたいけど、子どもが不幸になるかも。私がいると、周りがみんなイライラするから」。別居する親と会えていない少女(10)は、益子さんから将来の夢を問われてそう答えたという。

益子さんは深い悲しみを覚えた。「父母の対立による悪影響を最小限にとどめるための手当てを、一日も早く考えなければならない」